

## 東京都大田区臨海部における海辺の景観まちづくり学習のあり方に関する研究 —(その2)東京都大田区羽田地区の地域特性の把握—

### A Study on the Landscape Design Learning in Ota-ku, Tokyo Waterfront

#### — (Part2) About the local characteristic of the Haneda district—

○関奈穂<sup>1</sup>, 横内憲久<sup>2</sup>, 岡田智秀<sup>3</sup>, 首代佑太<sup>4</sup>

\*Naho Seki<sup>1</sup>, Norihisa Yokouchi<sup>2</sup>, Tomohide Okada<sup>3</sup> and Yuta Shudai<sup>4</sup>

**Abstract:** The purpose of this paper (Part2) is to grasp the local characteristic of the Haneda district. I walked to the city with the expert. The local characteristic of the Haneda district is following, 「Backbone of the city」, 「Culture of the sea」 and 「local community」

1. はじめに—前稿では, 小学校の「総合的な学習の時間」において海辺の文化・歴史を学ぶ取り組みを行うには, その学習プログラムが必要となることを捉えた。

そこで本稿では, その学習プログラムを構築すべく, 大田区内でも海が現存する羽田地区を対象に, 当地区の海辺に関する地域学習として学ぶべき当地区の地域特性を明らかにする。

2. 研究方法—羽田地区の地域特性を捉えるため, 文献調査<sup>[1]~[4]</sup>とともに, 有識者とのまち歩きを通じたヒアリング調査を行う (Table 1)。

3. 結果および考察—上述した調査により, 羽田地区の地域特性として Table 2 に示す, 「まちの骨格」「史跡」「人との繋がり」といった 3 つの特徴と, それらに関する地域資源の分布 (Figure 1) を捉えることができた。以降ではこれらの特徴を述べる。

(1) まちの骨格—当地区にはまちの「方位付け」として地区方向の呼び方が存在する。多摩川方面を「オモテ」, その逆方向の大森方面を「ウラ」と呼び, 旧羽田村の中心である萩中方面を「カミ」, その反対側の海老取川方面を「シモ」としている。それに従うように当地区には東西に延びる「本羽田通り」「ナカ通り」「ウラ通り」の 3 本の主要道がある。それらを繋ぐ南北に細く入り組んだ路地は 7 回曲がることから「七曲り」と称され, 現在も神輿の渡御経路になっている。また「本羽田通り」の幅員は江戸時代のままであり, その当時にしては広い幅員であったことから主要な通りであった。そのため当時の祭りの際には住民も着飾り, 多くの夜店が連なるなど, 賑わったとされる。「羽田道」は羽田地区と大森

Table 1. Outline of a research (This is original table my authors)

調査方法	文献調査 <sup>[1]~[4]</sup>	羽田地区を有識者*とまち歩きしながらヒアリング
調査期間	2011年8月4日~9月20日	2011年9月7日
調査項目	羽田地区歴史の変移	羽田地区の地域特性(風習や歴史的資源)

※羽田寿連合会羽田高齢者学級会長 幸田義一氏

地区を繋ぐ主要道であり, 江戸時代より羽田で水揚げされた海産物の運搬ルートであった。

(2) 史跡—当地区には「祠」がいたるところに存在し, そのなかでも「五十間鼻無縁仏堂」は, 地区内で最も海に近い祠であることから, 現在も多く漁師が参拝に訪れる。さらに多摩川沿いには「レンガの護岸」が約 1 km にわたって残っている。かつての多摩川は頻繁に洪水を起こしていたため, 1918 (大正 7) 年の河川修繕工事で作られ, 1928 (昭和 3) 年まで使用された。残存するその面影は, 羽田地区を洪水から守っていた当時の様子を伝えてくれよう。「看板跡」では, 隣接する東京国際空港が有名になったことで, 看板の広告収入のみで生計を立てることができたという。現在は使われていないが看板の鉄筋が残っており, 当時の事業開発による影響の大きさを感じることができる。

(3) 人との繋がり—「羽田三丁目・六丁目」の辺りは, 住宅地が密集しており, 細く入り組んだ路地のいたるところに床屋・風呂屋・蕎麦屋が一揃いで存在していた。また質屋も多く存在し, 鍋などの生活必需品を質に入れていたため, 住民同士の付き合いや質屋と住民の信頼関係が成り立っていたと言われる。また羽田地区は「町内会」の区分けが細かく, 13 町会と数も多いため町内会ごとに人々の結束が強いとされる。「羽田弁」は羽田地区の漁師が使用する言葉であり, 海上で会話するため, 短い言葉を大きな声で話す点が特徴であり, 荒々しいが海上でコミュニケーションをとるための重要な言葉であるといえる。

以上より羽田地区の地域特性として, 漁師町の面影や海にまつわる史跡が多く残っており, 海の文化が蓄積されている実態が捉えられた。また古くから人との繋がりを垣間見ることができ, 当地区を学ぶうえでは貴重な資源が多数捉えられたと認識する。



Figure 1. Haneda district (This is original figure my authors)

Table 2. The local characteristic of the Haneda district (This is original table my authors)

特徴	地点	地域資源	内容
まちの骨格	—	方位付け	地区方向の呼び方が存在し、多摩川方面を「おもて」、大森方面を「うら」、海老取川方面を「しも」、萩中方面を「かみ」とする
	①	本羽田通り	本羽田通りの幅員は江戸時代から変わっておらず、その当時においてこの道幅は広かったため主要な通りであった 祭りの際には多くの夜店が連なり、漁師も着飾るほど賑わった
	—	七曲り	細く入り組んだ路地を7回曲がり、「おもて」と「うら」を繋ぐ道として祭りの際には神輿が通る
	②	羽田道	羽田地区と大森地区を繋ぐ道であり、江戸時代より海産物の運搬に利用された
史跡	③	祠	羽田地区には祠がいたるところに存在し、多くの漁師が参拝に訪れた
	④	五十間鼻無縁仏堂	羽田地区の数ある祠のなかで、最も海に近い場所に位置していることから、現在も多く漁師が参拝に訪れる
	—	レンガの護岸	当時の多摩川は頻りに洪水を起こしていたため、1918(大正7)年の河川修繕工事で作られ、1928(昭和3)年まで使用された
	⑤	看板跡	空港ができたで、この看板の収入はそれのみで生活ができるほど高いものであった
人との繋がり	—	羽田三丁目・六丁目	住宅地が密集しており、細く入り組んだ路地が多くあり、床屋・風呂屋・蕎麦屋が一揃いとなって多く存在した 質屋も多く存在し、鍋などの生活必需品を質に入っていた
	—	町内会	羽田地区は町内会の区分けが細かく、数も多い(13町会)
	—	羽田弁	羽田地区の漁師が使用する言葉も存在し、海で会話するため、大きな声で短い言葉で話す
その他	—	水田	この辺り一帯は田んぼであった 子供は遊びに夢中で肥溜めに落ちることもあった
	⑦	多摩川	1940(昭和15)年頃、子供達は多摩川で水遊びをしていた

参考文献[1]大田区：大田区 HP <http://www.city.ota.tokyo.jp>. [2]京浜急行電鉄株式会社：京急グループ110年史，2008. [3]横山宗一郎，宮田登：空港のとなり町「羽田」，株式会社岩波書店，1995. [4]橋爪隆尚：羽田史誌，中央社，1975.

謝辞：本研究を進めるにあたり、現地まち歩きやヒアリング調査でご協力頂いた羽田寿連合会羽田高齢者学級会長の幸田義一氏に深謝致します。